

名寄市における子供の学習支援・子ども食堂・子どもの居場所づくりの実践(3)2018年度の実践活動を中心にして

著者	松岡 是伸, 小野川 文子
雑誌名	地域と住民 : コミュニティケア教育研究センター年報
号	3
ページ	107-116
発行年	2019-05-31
出版者	名寄市立大学コミュニティケア教育研究センター
ISSN	0288-4917
書誌レコードID	AN0001106X
論文ID (NAID)	40021940998
URL	http://id.nii.ac.jp/1088/00001807/



実践報告

名寄市における子どもの学習支援・子ども食堂・ 子どもの居場所づくりの実践(3) —2018年度の実践活動を中心にして—

松岡是伸¹⁾* 小野川文子²⁾

¹⁾ 北星学園大学社会福祉学部福祉計画学科 ²⁾ 名寄市立大学保健福祉学部社会福祉学科

キーワード：学習支援 子ども食堂 居場所づくり

1. はじめに

名寄市の子どもの学習支援・子ども食堂・子どもの居場所づくりの実践は2016年度から始まった(このプロジェクトを以下、プロジェクトAという)。そして2017年度からは生活困窮世帯若しくはその恐れのある世帯を対象とした子どもの学習支援事業も開始されている(このプロジェクトを以下、プロジェクトBという)。これらの活動は、いくつかの基礎的・予備的な調査、実証研究を経てプロジェクトとして形作られてきたものである。松岡(2018)によれば、「…プロジェクトAの学習支援は、対象を限定せず、広く地域の子どもたちに参加してもらおうジェネラルなものである。そのうえでプロジェクトBでは、生活困窮世帯の子どもたちを対象に学習支援をおこなう。そのためプロジェクトBはアフーマティブ(積極的優遇)な事業の展開となる。この二つのプロジェクトが両輪となって、まず「プロジェクトAの実践」で広く地域実践を行い、「プロジェクトBの実践」でスティグマを付与しないように、生活困窮世帯の子どもの学習支援を展開する…」(松岡2018:119)というものである。このようなプロジェクト実践のなかで、いくつかの成果と課題も見えてきているのが現状である。

そこで本稿では、プロジェクトA、すなわち名寄市で展開されている子どもの学習支援・子ども食堂・子どもの居場所づくりの2018年度の実践活動を記述することを目的とする。プロジェクトBについては、2017年度実施されたアンケート調査の結果のみについて報告し、詳細な実践報告は別稿に譲ることとする。

2. 2018年度の実施状況

1) 実施回数と子どもの参加人数

2018年度は5回、すべて土曜日に実施した。開催場所は3か所、参加者数から場所による影響はないと思われるが、開催場所による在籍校の比率に若干違いがみられた。子どもの参加人数は84人(延べ人数143人)、1回平均28.6人と昨年の18.5人(松岡:2018)を大きく上回る結果となった(表1)。

参加者の学年をみると、初回は小学校低学年(1,2年)が18人(56.3%)と半数以上を占めるが、徐々に小学校高学年が増えた傾向にある(図1)。全参加者の学年をみると、小学校1年生と4年生が多い。子どもの参加回数は、参加1回45人(53.6%)、参加2回24人(28.6%)、参加3回12人(14.3%)、参加4回1人(1.2%)、参加5回2人(2.4%)と4割以上が複数回参加している(図2)。小学校高学年以上では、友だちと自転車に参加するなど気軽に参加できる場所となっている。

*責任著者 E-mail:y-matsuoka@hokusei.ac.jp

表1 2018年度子どもの学習支援・子ども食堂の実施状況

	日程	場所	子どもの参加	学生の参加	民生委員他	合計
1回目	7月28日(土)	名寄市総合福祉センター	33(保護者1)	10(ボラ6)	15	58
2回目	8月25日(土)	名寄市民文化センター	23(保護者0)	9(ボラ1)	8	40
3回目	10月27日(土)	ふうれん地域交流センター	26(保護者3)	6(ボラ2)	10	42
4回目	12月15日(土)	名寄市民文化センター	25(保護者2)	6(ボラ4)	12	43
5回目	2月16日(土)	名寄市民文化センター	43(保護者1)	6(ボラ0)	11	60

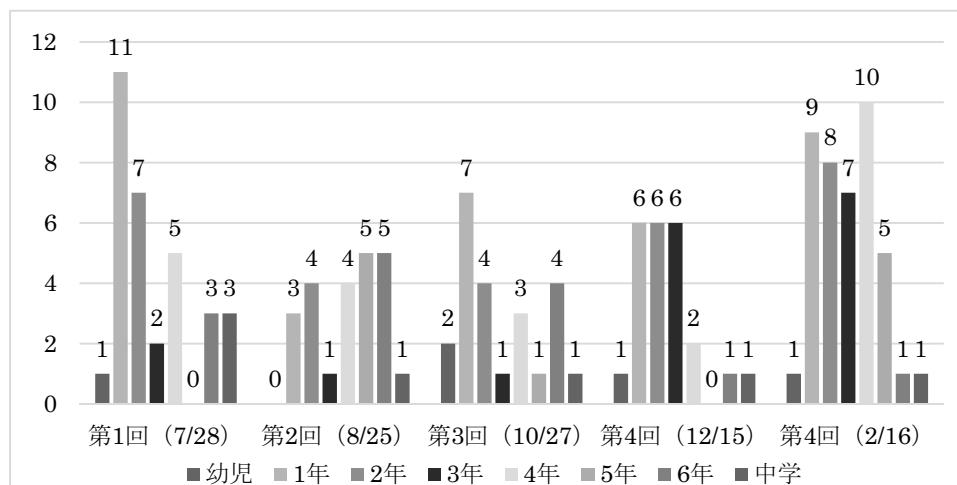


図1 学年別参加人数

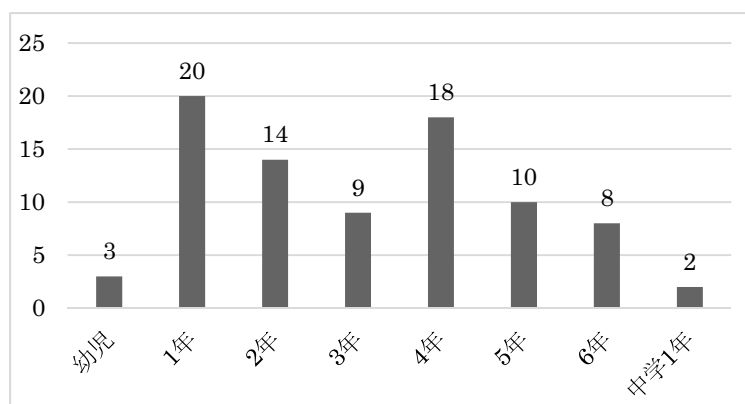


図2 学年別参加者数 (n=84)

2) 2018年度の内容と特徴

2018年度は、名寄市立大学の連携教育科目「地域との協働Ⅱ」(全学科2年次必修)、「地域との協働Ⅲ」(全学科3年次選択)に位置づけ、学生がより主体的、継続的に参加できるようにした。看護学科、栄養学科、社会福祉学科、社会保育学科2年生の12名が履修し、実施までに、日本の子どもの生活実態、全国の子ども食堂の取り組み状況を講義形式で学び、各自が問題意識をもってプロジェクトに参加できるようにした。その上で、7月からの子どもの学習支援・子ども食堂・居場所づくりの内容を考え、主体的に運営に関わるよう意識して取り組んだ。

子どもの学習支援では、これまでと同様に子どもたちの学習を「強制」ではなく自分のペースで学習するスタイルを引き継ぎつつ、午前中は「もくもくコース」(集中して勉強するグループ)と「ゆるゆるコース」

（ゆっくり、時々休みを入れながら勉強するグループ）に部屋をわけ、より学習しやすいように工夫を行った。子どもの学習支援は、様々な学年と一緒に勉強することから、どうしても同じペースで勉強することが難しい。2つに部屋を分けることで、より勉強しやすい雰囲気をつくるようにした。「ゆるゆるコース」と「もくもくコース」は、自分で選択するようにし、途中でコース変更もできるため、「もくもくコース」で一気に宿題をやり終え、「ゆるゆるコース」で塗り絵をしたり、学生とおしゃべりしたりする子どももいた。しかし、多くの子どもには1時間の勉強が限界である。どうしても集中力が切れてしまい、後半は遊びタイムとなり、学生と「かくれんぼ」や「だるまさんがころんだ」など楽しむ様子も見られた。学生は、自由に子どもたちの中に入り、勉強をみたり、一緒に遊んだりするようにした。時々、子ども同士のトラブルやなかなか勉強に集中しない子どもの対応に苦労しながら、それも学びとなっている。



子ども食堂のメニューは、学生が考えたもので、表2に示す。学生が意識した点は、「忙しい保護者がなかなか作れないメニュー」と「季節感」である。メニューにあわせ食材を考え、分量を計算した。会場の設備や調理時間の制限もあり多少変更を余儀なくされたが、おおむね学生の希望を取り入れることとした。調理については、名寄市の民生委員主任児童委員、名寄市社会福祉課の方々に協力いただき、どんなメニューにも対応していただいた。友だちと食べることで苦手な食べ物を食べることができた子どもや、何回もお代わりをする子どもなど様々である。第5回目には手作りチョコレートにチャレンジした。板チョコを溶かし、アルミ型に入れデコレーションする簡単なものだが、それを目当てに参加した子どもも多かったようである。チョコレートはその場で食べるもの、おみやげとして持ち帰るもの、それぞれの楽しみ方をしていた。

表2 子ども食堂メニュー

第1回	炊き込みご飯、豆腐ハンバーグ、サラダ
第2回	冷やし中華、フルーツポンチ
第3回	わかめご飯、かぼちゃシチュー、コールスロー
第4回	ハヤシライス、コンソメスープ、ショートケーキ
第5回	五目ちらし寿司、豚汁、手作りチョコレート



写真 子ども食堂メニュー例

3) 子どもの学習支援・子ども食堂・子どもの居場所づくりの役割

2016年にスタートした名寄市の子どもの学習支援「もっちもち」・子ども食堂「だだちゃ」・居場所づくり「すぴか」は、市内の小学校・中学校をはじめ、市民にも少しずつ周知されるようになったと思われる。

子どもの学習支援「もっちもち」の主なねらいは、①子どもに対して地域で勉強をする機会と場を提供する。②大学生やボランティアとともに学ぶことで学習習慣や学びなおしを支援していく。子ども食堂「だだちゃ」の主なねらいは、①子どもに対して地域で食を提供する場と機会を設ける。②子どもたち自らが食事を料理する機会も設ける。子どもの居場所づくり「すぴか」の主なねらいは、子どもに対して地域の居場所(場)を提供することである(松岡：2018)。以上のねらいを達成するために、大学、行政、地域が連携し今日に至っているが、衛生管理上の問題から、子どもが調理に参加することが難しいなど課題も多い。

年々、参加者は増加し、毎回、参加を楽しみにしている子どもも少なくない。時間前から待っている子ども、保護者の迎えが来てもなかなか帰ろうとしない子ども、終了時間間近になり「もう、楽しい時間が終わってしまう」と寂しそうにつぶやく子どもなど、子どもたちにとっては貴重な機会・時間となっていると思われる。では、子どもたちは何を求めて参加してきているのだろうか。2018年度の最後の実施日に、参加者から「参加理由」を聞いてみた。方法としては、想定される「参加理由」をいくつか提示し、参加者に挙手をしてもらった。結果は表3に示す。

表3 子どもの参加理由(第5回実施。N=31)複数回答

	参加理由	人数
1	勉強ができる	22
2	チョコレートづくり	19
3	大学生のお兄さん、お姉さんと勉強したり遊んだりできる	16
4	友だちと遊べる	13
5	親や先生に言われて参加した	12
6	時間つぶし	10
7	友だちに誘われて参加した	8
8	ご飯が食べられる	7
9	家がつまらない	6
10	楽しいから	1

参加理由の1位は「勉強ができる」であり、子どもの学習支援のねらいは達成している。友だちと一緒に勉強する効果は大きく、高学年の子どもは、食後も集団で勉強する姿も見られた。また、他の友だちが遊んで騒々しい中、もくもくと勉強している子どもがいるなど、子どもが自主的に取り組む姿もあった。第2位の「チョコレートづくり」は、第5回目だけの活動であったが、なかなか家庭ではできない取り組みも魅力となっている。第3位は「大学生のお兄さん、お姉さんと勉強したり遊んだりできる」で半数の子どもが学生との係わりを楽しみにしていた。大人でもなく子どもでもない大学生の存在は大きい。子どもの中には、大学生にべったり甘える子どもも少なくなく、甘えを受け止めてもらえる存在にもなっているのだろう。

「友だちと遊べる」に関しては、学校区が広く、下校後、友だちと遊ぶことができない子どもや小規模校の子どもの場合、他の学校の友だちと遊んだり過ごしたりすることができる場合はまさに「子どもの居場所」となっている。友だちが友だちを呼び、たとえ「親や先生に言われてきた」子どもであっても、ここで新たな友だちとつながり、次の参加にもつながっていると思われる。子どもの数が少なく、学区が広い名寄市において大きな役割を果たしているといえる。「時間つぶし」「家つまらない」という理由も、ここに来たら「友だちがいる」「大学生のお兄さん、お姉さんが勉強をみてる、遊んでくれる」のである。

一方で、学習状況や行動で気になる子どもが複数参加していた。学習の遅れや感情のコントロールがうまくできない子ども、頻繁にちょっかいを出してくる子どもたちである。彼らにとっても「強制ではない」「自由な雰囲気」の中で、自分らしくいられる「居場所」として位置づいているのかもしれない。

4) 参加学生から

「地域との協働Ⅱ」の授業として参加してきた学生たちと1年間のまとめを行った。子どもたちの様子から「学校や学年が違って仲がいい」「子どもたちの居場所になっている」として、子どもの学習支援、子ども食堂は他学年や大人との関りの場となっていることを実感している。また、「特別な支援を必要とする子どもの利用も増えている」との感想が出され、対応の難しさも報告された。また、食事作りを通して「人員配置、衛生面にも気を配る」ことや「好き嫌いがある子どもたちもいるが、いろいろな人と楽しく食事をする場なら食べられる子どももいる」等、多くの気づきもあったようだ。

1年間の取り組みを通して学生たちは、子どもの学習支援、子ども食堂が「学校や家庭で居場所のない子の居場所になっている」「普段、関わらない人たちと関われる機会となっている」「現代の子どもを考えるきっかけになった」と取り組みの意義を感じている。一方で、「子どものニーズに合わせて対応を改善していくこと（場所、時間、人員、あそび、学習等）」や「ボランティアの募集の仕方」「学生や地域の人々の認知の低さ」などの課題も出された。

子どもの学習支援・子ども食堂・子どもの居場所づくりに学生が関わることの意義は大きい。しかし、土日に実施することで、集中講義が重なったり、アルバイト等で参加できない学生もいた。また、授業として取り組むことで、より主体的・継続的に関わる事ができた半面、関わる学生が限定されてしまうという課題もある。

3. 子どもの学習支援事業に関するアンケート調査の実施

ここからは2017年に実施された子どもの学習支援事業に関するアンケート調査結果について言及していく。これは「1」でふれたようにプロジェクトBに関する取り組みとなる。

アンケートの目的は、経済的理由、ひきこもり・ひきこもりがち、登校がスムーズにできない及び不登校等、何らかの学習上の困難を抱えている児童生徒を対象に子どもの学習支援事業をより効果的に実施するために、保護者らの子どもの学習支援に対するニーズや経済的困り感等を明らかにし、本事業実施の基礎資料とすることである。

アンケート調査方法は、2017年7月第1週に市内すべての小中学校を通じて児童生徒に配布し、保護者を対象にしておこなった。提出締切は2017年7月14日とし、小中学校を通じて回収された。総配布数1,974枚、回収1,180枚(回収率59.8%)、有効回答数1,168枚(有効回答率99.0%)であった。

調査研究における倫理的配慮として、本アンケートにおける調査の目的、調査方法等を依頼文書にて説明・配布した。本アンケートに対する同意は、アンケート調査の回答と返送によるものとし、同意しない場合は返送しなくてよい旨を明記した。そして本アンケートで得られた回答や個人情報については、本事業並びに学術的な目的のみに使用し、ご提供いただく個人情報は本事業以外には一切、使用せず外部に漏れることはないことを明記し実施した。回収は、回答者が封筒に入れて厳封し、小中学校の協力のもと回収した。そのため回答内容は、回答者および研究代表者、共同研究者しか見ることができないような措置を講じ、個人情報等の管理、外部への漏洩がないようにした。

4. アンケート結果と考察

1) 生活困窮や不登校、ひきこもりの子どもたちに対する学習支援の実施について

生活困窮や不登校、ひきこもりの子どもたちに対する学習支援の実施について、「とても良い」622世帯(54.3%)、「良い」234世帯(20.4%)であり、肯定的回答が7割以上であった。一方、「あまり良くない」33世帯(2.9%)、「まったく良くない」12世帯(1.1%)と否定的回答もあった(図3)。

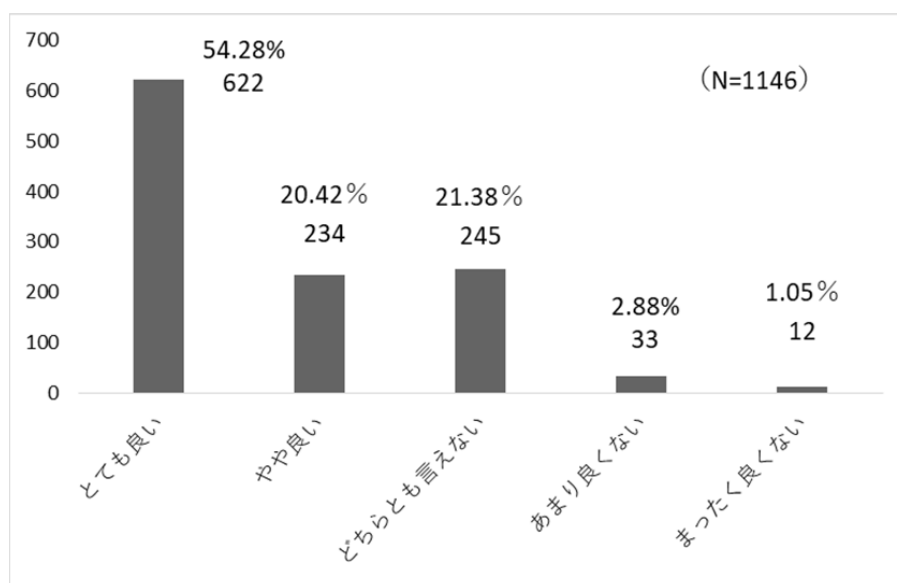


図3 子どもの学習支援事業の実施

2) 家庭の経済的な「困り感」の有無

ご家庭における経済的困り感について、困り感を抱えているという回答は339世帯(29.17%)であった。そのなかで「とても困っている」は71世帯(6.11%)であった。一方で困り感を抱えていないという回答は498世帯(42.86%)であった。ただしそのうち「あまり困っていない」は338世帯(29.09%)であった。ちなみに「どちらとも言えない」が325世帯(27.97%)であった(図4)。

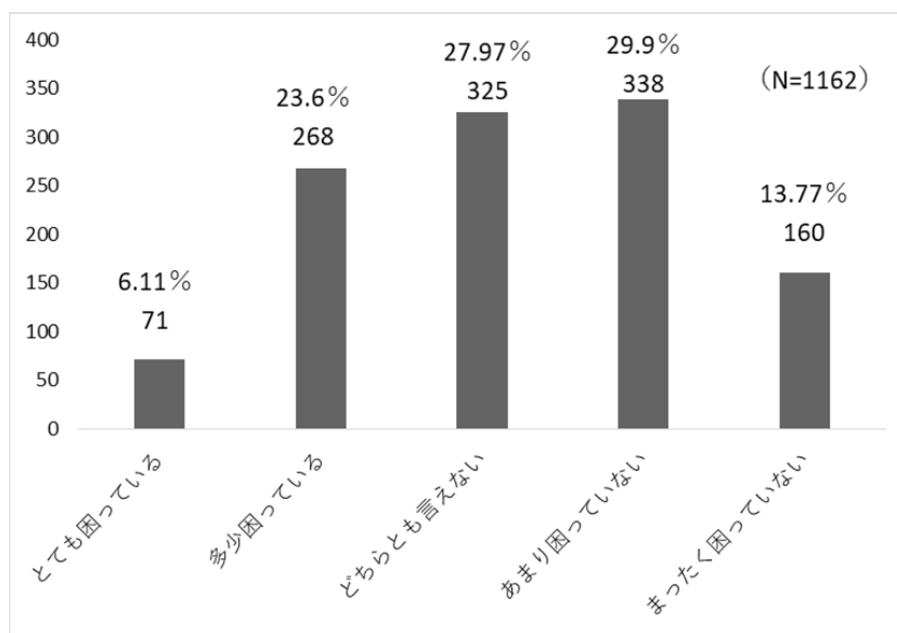


図4 経済的困り感

子どもの学習支援の実施と家庭の経済的な「困り感」の有無をクロス集計した（表4）。

子どもの学習支援に対して肯定的回答をしている世帯（「とても良い」、「やや良い」）は、「あまり困っていない」が277世帯（24.2%）、「まったく困っていない」が117世帯（10.2%）であり、あわせると34.4%が経済的困り感をあまり抱えておらず、学習支援に肯定的な傾向にある。

次に、子どもの学習支援について肯定的回答（「とても良い」、「やや良い」）であり、経済的困り感を抱えている世帯は、「とても困っている」が51世帯（4.5%）、「多少困っている」が176世帯（15.4%）であり、あわせれば19.9%であった。子どもの学習支援に肯定的回答をした人の2割が経済的困り感を抱えていることが示された。一方で子どもの学習支援に否定的回答であり、経済的困り感を抱えている（「とても困っている」、「多少困っている」）は、14%であった。

これらのことから、子どもの学習支援に否定的回答であり、経済的困り感を抱えている層が存在することが明らかになり、この層をいかに本事業に取り込むかが課題となる。

表4 子どもの学習の実施と家庭の経済的「困り感」の関係

	学習支援					合計	
	とても良い	やや良い	どちらとも言えない	あまり良くない	まったく良くない		
困り感	とても困っている	42 3.7%	9 0.8%	15 1.3%	4 0.3%	1 0.1%	71 6.2%
	多少困っている	118 10.3%	58 5.1%	75 6.5%	8 0.7%	3 0.3%	262 22.9%
	どちらとも言えない	167 14.6%	68 5.9%	75 6.5%	10 0.9%	2 0.2%	322 28.1%
	あまり困っていない	207 18.1%	70 6.1%	51 4.5%	7 0.6%	1 0.1%	336 29.3%
	まったく困っていない	88 7.7%	29 2.5%	29 2.5%	4 0.3%	5 0.4%	155 13.5%
	合計	622 54.3%	234 20.4%	245 21.4%	33 2.9%	12 1.0%	1146 100.0%

(N=1146)

3) 利用している制度や手当

対象となる世帯に対して現在、利用している福祉的制度や手当について複数回答でうかがった。その結果、児童手当が 86.8%、児童扶養手当が 15.8%、就学援助が 11.9%、ひとり親家庭等医療費助成制度が 7.3%、特別児童扶養手当が 2.0%、障害児福祉手当 0.9%、その他 0.6%、母子父子寡婦福祉資金貸付金 0.3%、生活保護が 0.3%、生活資金制度（市独自の貸付制度）0.2%、生活福祉資金制度、年金担保融資は利用がみられなかった（表 5）。

調査対象世帯の多くは、児童手当の対象となっているため 8 割以上が受給していた（ただし他の調査と同様に「利用していない」の中には、受給しているにも関わらず、その認識がない場合も想定される）。

表 5 利用している制度や手当

	割合
児童手当	86.8 %
児童扶養手当	15.8 %
就学援助	11.9 %
ひとり親家庭等医療費助成制度	7.3 %
特別児童扶養手当	2.0 %
障害児福祉手当	0.9 %
母子父子寡婦福祉資金貸付金	0.3 %
生活保護	0.3 %
生活資金制度生活資金制度	0.2 %
生活福祉資金	0 %
年金担保融資	0 %
その他	0.6 %

4) 本事業に対する対象世帯の有無

本アンケートでは、プロジェクト B に関する子どもの学習支援の対象と想定する世帯として、①ひきこもり・ひきこもりがちな児童生徒の属する世帯、②登校がスムーズにできない、不登校等の児童生徒に属する世帯、③児童手当を除いた福祉的な制度や手当を利用されている世帯を示し、アンケート対象者に該当するか、否かを問うた。その結果、アンケートで想定した対象世帯に該当するのは、128 世帯（11.57%）であった（図 5）。本アンケートの結果から全体の約 1 割がプロジェクト B における子どもの学習支援の対象となりえると想定された。

5) 子どもの学習支援参加の有無について

想定される対象世帯の 128 世帯に対して、学習支援の参加の有無についてうかがったところ、「希望する」は 9 世帯（7.20%）「参加しない」は 116 世帯（92.80%）であった。なお 3 世帯は無回答であった（図 6）。

本アンケートにおいて子どもの学習支援の参加希望は 7%ほどみられた。そこで「希望しない」の理由をたずねたところ、「仕事等で送迎が困難」、「放課後の遅くなった時の帰宅が心配」、「対象となる世帯でないため」、「乳幼児や障害児がいるため」「児童生徒本人が行きたがらない」「不登校やひきこもりがちなため困難」などであった。例えば「仕事等で送迎が困難」では、「…本当はやらせてみたいが、遠くて送り迎えの時間も仕事でできず…」や、「不登校やひきこもりがちなため困難」では「…行きたがらない、不登校だったため。…。…経済的にかなり厳しいのですが…」などの声がみられた。一方で、「子どもの学習支援が何をするのかかわからない」や、「回数が少なく学習効果がないのでは」という回答もあった。

これらのことから、本事業への参加を促したい人々が家庭の仕事や育児、介助、児童生徒の送迎の問題から参加を見合わせている状況が明らかとなった。

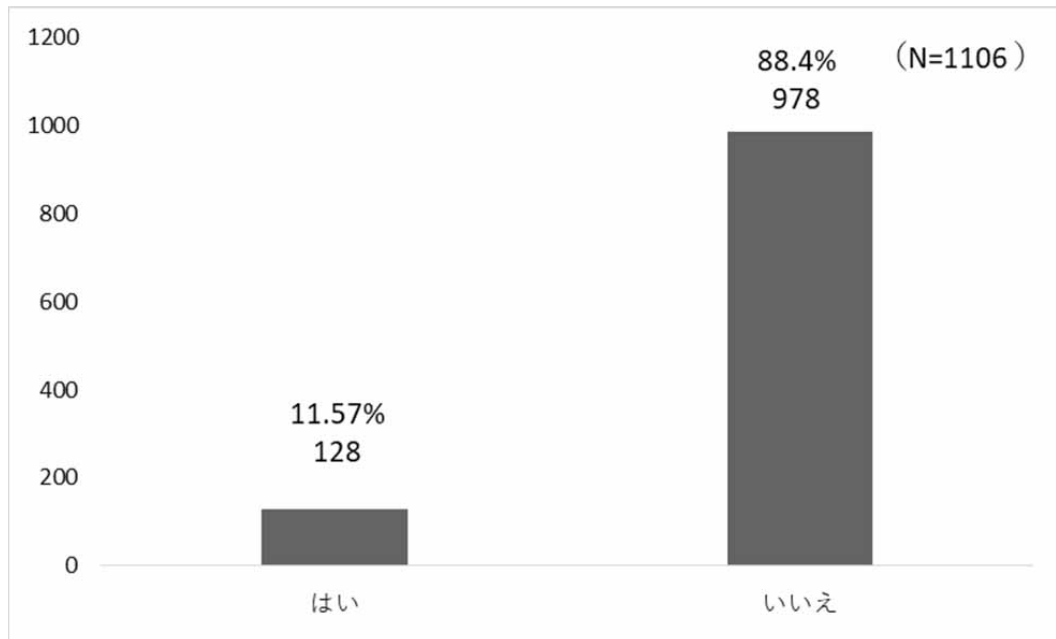


図5 本事業の対象世帯

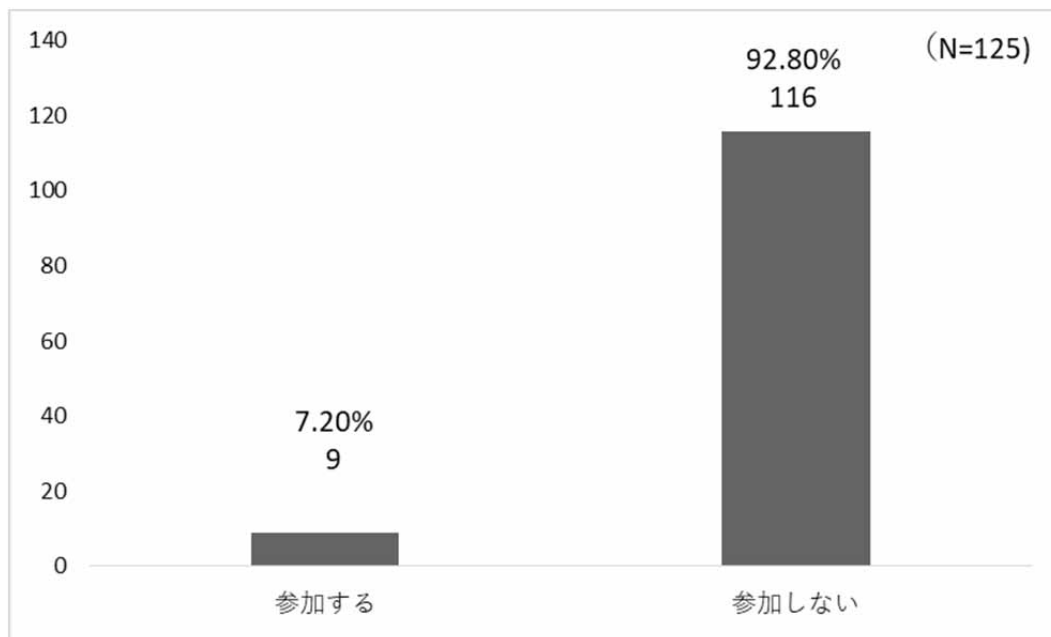


図6 参加希望

6) 本事業への意見・要望

本アンケートでは、自由回答記述で本事業への意見・要望を聞いた。自由回答記述は、人々の思いや考えを言葉として率直に聞くことができ、その言葉には重みがある。そこで自由回答の主なものを分類すると、1つは、学習支援の回数が不足している、2つ目は、本当に困難を抱えている児童生徒は参加しない、3つ目は、不登校やひきこもりの児童生徒は参加しない、となる。また、「対象世帯を限定してしまうのは、子どもにとって公平にならないと感じる」という重要な意見もあった。この点は、プロジェクトAとBの構造、関係性であり、我々も慎重に進めてきたが、当事者やそのまわりからすれば不公平に映ってしまうと考えられる。今後は、プロジェクトBの実施時における丁寧な説明と改善が必要である。また、「不登校の子どもを外に連れ出すのは大変な事。…理由は様々で、一度傷つけられた心はなかなか開かない…」という回答も本事業で考慮

すべき課題である。これらの意見は、本事業が対象としている児童生徒に対する重要な示唆であった。

一方で、本事業やプロジェクト全体、名寄市の積極的な取り組み、大学生のボランティア参加などに対する評価の声もあった。それを紹介すると「子どもが教育を受けられる環境は、家庭の経済的な問題関係なしに整えてあげられるよう、名寄市の子どもの学習支援事業が活発になることを心から応援しています。大学生のボランティアの方が支援して下さっていることにも感謝致します」であった。

5. まとめ

ここでは2018年の本プロジェクトの評価や課題をまとめていく。

本プロジェクト全体を通じて参加者が増加傾向にある。この点は2016年の開始から本プロジェクトが児童生徒や保護者、地域から認識され徐々に定着してきていると言える。そのうえでプロジェクトAの子ども学習支援で見られた「もくもくコース」や「ゆるゆるコース」の部屋分けなどの工夫が参加する児童生徒の満足度や充実した時間の提供につながっていると考えられる。

課題としては、昨年度同様に、担い手の多元化である。プロジェクト全体構想では、中期的に地域においてのプロジェクトの運営や担い手の創出を目指してきた。これまでも民生委員、児童委員等からの参加者はみられるものの、今後はやはり地域の中でその担い手を広げていく必要がある。

3年目を終える今、本年度は参加する子どもたちも安定的に増えており、子どもの学習支援の部屋分けのような取り組みも見られた。本プロジェクトが充実していくことを願っている。

謝辞

本プロジェクトを行うにあたり、各機関・団体、個人からのご協力とご支援をいただいた。まず謝辞への個人名の記載を辞退されたが感謝しなければならないのが名寄市健康福祉部並びに社会福祉課等の皆さまであり、あらためて感謝申し上げます。

名寄市教育委員会、名寄市社会福祉協議会小笠原志朗氏には、本プロジェクトへのご理解とご尽力をいただき感謝を申し上げます。

本プロジェクトの学生メンバー、民生委員、児童委員などの地域の方々に感謝を申し上げます。皆様のご尽力がなければ実現しないプロジェクトをいつも支えて頂いている。

最後になったが、本プロジェクトに理解をいただき、活動を支えてくれた皆様と、子たちを送り出してくれた保護者の方々に感謝申し上げます。

付記

本プロジェクトは、名寄市立大学コミュニティケア教育研究センター事業並びに名寄市立大学コミュニティケア教育研究センター「2018(平成30)年度課題研究」(研究代表者・小野川文子)の助成の一部を受けて実施された。

文献

松岡是伸(2017)「名寄市における子どもの学習支援・子ども食堂・子どもの居場所づくりの実践 ―地域における各機関・団体の連携とスティグマの払拭を願って―」『地域と住民：コミュニティケア教育研究センター年報』1巻(通巻35号)、名寄市立大学コミュニティケア教育研究センター、109-124。

松岡是伸(2018)「名寄市における子どもの学習支援・子ども食堂・子どもの居場所づくりの実践(2) ―2017年度の実践活動を中心にして―」『名寄市立大学コミュニティケア教育研究センター』第2号(通巻36号)、名寄市立大学コミュニティケア教育研究センター、117-125。